

## 絶滅危惧種ヒナモロコの繁殖

1992年の国連環境開発会議では「生物多様性条約」が調印され、その翌年国内では通称「種の保存法」が施行された。さらにその翌年、環境基本計画が閣議決定され、この中で「生物の多様性の確保及び野生動植物の保護管理」の重要性が謳われた。その半年後、わが国の特別天然記念物トキの絶滅が報じられたが、この鳥はわずか100年前には日本各地にみられた身近な鳥であったという。もっと早い時期に適切な保護対策が取られなかったことが残念である。

淡水魚の場合、環境庁のレッドデータブックによると、5種に1種が絶滅の危機に瀕しているとされる。博多湾流入河川には、絶滅の危険性が最も高い「絶滅危惧種」のヒナモロコ・ニッポンバラタナゴが生息し、なかでもヒナモロコは、昨年秋に筑後川流域の田主丸町で発見されるまでは、天然水域での生息がこの20年近く確認されていなかった魚である。

当協会は、福岡市の委託を受け、種の保全を目的として飼育中のヒナモロコの繁殖に取り組んで4年になる。環境庁が取り上げるまで無名であったこの小魚について紹介したい。  
**プロフィール**：ヒナモロコは、全長6～7cmのコイ科の魚で、用水路・溜池などの泥底でどちらかといえばやや汚れた水に生息する。わが国では福岡市内のほか、筑後川や矢部川水系など分布が限られているが、外国では朝鮮半島から中国大陸にかけて広く分布することから、かつて北部九州が大陸と陸続きであったことを示す動物地理学上重要な魚とされている。

**産卵と飼育**：産卵は5～7月の午前中に行わ

れ、直径1.0ミリの卵は水草に産みつけられる。産卵数は1回に100～500粒で、卵は2日でふ化する。仔魚の口は非常に小さいため、餌はクロレラで培養したシオミズツボワムシを3～4日間与え、次にアルテミア幼生、やや大きくなるとミジンコ・配合飼料に切り替えている。初期餌料として鑑賞魚用のエサでも飼育できるが、高い生存率を得ようとすればこの方法が現在のところベストのようである。全長1cmを越えれば飼育は容易で3～5年生きるが、産卵は2年魚までとみた方がよい。



**今後の課題**：ヒナモロコを保全するための池が、室見川河畔の金武地区に完成しており、この秋にはここへ放流する予定である。この池にヒナモロコの生息環境が再現され、種の維持ができることを期待したい。

トンボ・メダカ・カエルなどの身近な生物が、河川改修や圃場整備、宅地開発などによって次々に生息の場を失ったが、今後はビオトープの概念を取り入れ、多様な生物が生活できる水辺環境づくりを進めることが大切である。自然環境に対する市民の意識と、これに応える行政の姿勢がこのカギを握っていると言えよう。ヒナモロコが、絶滅危惧種から再び普通の雑魚になり、人工の池から野外へ戻れることを期待している。